

No.1224 犬の心基底部腫瘍 大阪府立大学

動物：イヌ、フレンチブルドッグ、雌、11歳齢。

臨床症状：2017年11月28日、腹部腫脹の主訴にて近医を受診し、12月8日にX線検査と心エコー検査で心基底部腫瘍が疑われたため、12月15日に本学獣医臨床センターを受診。初診時のCT検査では、心臓背側に軟部組織陰影が認められた。また、腹水貯留が認められた。2017年12月19日～2018年1月24日、放射線治療を行ったが、腫瘍の体積に変化はなかった。同年7月12日から体調が悪化し、7月18日に死亡した。翌日、剖検が行われた。

剖検所見：腫瘍は12.5×6.5×6.0 cm大で、心基底部の大動脈と肺静脈の間を圧排性に存在していた。断面は灰白色充実性であった。肺では腫瘍の転移（右後葉背側、0.6×0.6 cm大、2箇所）、（左後葉腹側、0.4×0.4 cm大、1箇所）がみられた。

診断：肉腫様形態および軟骨化生がみられた大動脈小体癌

腫瘍細胞は心基底部において、心外膜周囲の脂肪組織を取り込みながら増殖していた。腫瘍細胞の大部分は紡錘形で、小型円形、多角形、あるいは巨大細胞が混在していた。腫瘍細胞の増殖形態は、束状、巣状、びまん性を示していた。巣状の増殖部位は薄い線維性組織によって区画されており、好塩基性の顆粒状細胞質を持つ多角形の腫瘍細胞がみられ、同様の組織像が肺の転移巣でもみられた。肺の転移巣の腫瘍細胞、心基底部の多角形の細胞と巨大細胞はサイトケラチン AE1/AE3、vimentin、chromogranin A、synaptophysin に陽性であり、一般的な大動脈小体腫瘍と同様の免疫表現型を示した。小型円形細胞は AE1/AE3 陽性、vimentin、chromogranin A、synaptophysin に一部陽性、紡錘形の細胞は AE1/AE3 に一部陽性、vimentin に陽性、chromogranin A に一部陽性、synaptophysin に陰性であった。S-100 と α -SMA はすべての腫瘍細胞で陰性であった。紡錘形腫瘍細胞が肉腫様に増殖する部位では、軟骨様組織がみられ、トルイジンブルー染色で異染性を示した。また、電顕で腫瘍細胞の細胞質内に神経内分泌顆粒が観察され、神経内分泌細胞由来と判断した。原発部位、腫瘍細胞の形態的特徴、免疫染色結果及び肺転移がみられたことから大動脈小体癌とした。

考察：本腫瘍は様々な細胞形態を示したが、HE で腫瘍細胞の形態に移行像がみられ、免疫染色結果からも単一の腫瘍と考えられた。紡錘形細胞が増殖した肉腫様部位が主体であり、軟骨形成もみられたが、リニアックを用いて局所的に心基底部に放射線照射を行っていたことから、腫瘍の形態変化と放射線の照射の影響が疑われた。（桑村 充）